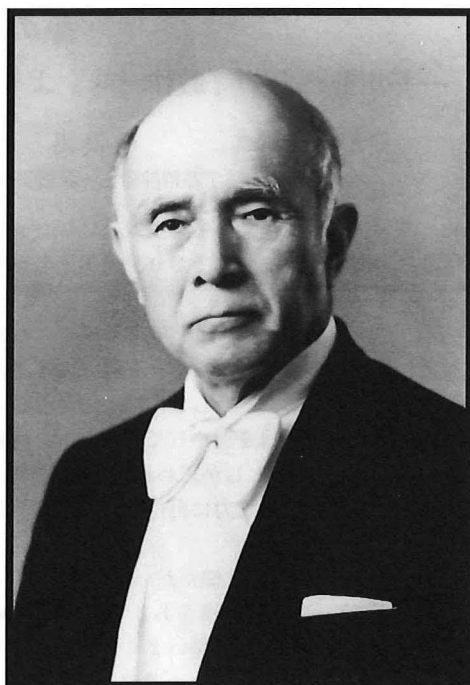


追 悼



天 児 民 和 (1905 年 8 月 31 日生)

九州大学名誉教授 (医学部整形外科学)

1995 年 4 月 6 日 午後 5 時 36 分, 急性左心不全のため九大病院にて逝去 (89 歳)

自 宅: 福岡市南区井尻 5 丁目 10-24

出身地: 神戸市

略 歴

- 1930 年 3 月 九州大学医学部卒業
- 1932 年 4 月 九州大学医学部助手
- 1933 年 10 月 九州大学医学部講師
- 1935 年 7 月 ドイツ留学 (1936 年 10 月帰国)
- 1936 年 11 月 九州大学医学部助教授
- 1939 年 5 月 応 召
- 1945 年 4 月 召集解除
- 1945 年 6 月 新潟医科大学教授
- 1946 年 6 月 新潟大学医学部附属病院長
- 1950 年 九州大学医学部教授
- 1958 年 8 月 九州大学医学部附属病院長
- 1960 年 4 月 九州大学医学部長 (2 期)
- 1965 年 9 月 ドイツ整形外科学会名誉会員
- 1969 年 3 月 九州大学退官, 名誉教授
- 1969 年 4 月 九州労災病院院長
- 1978 年 5 月 英国整形外科学会名誉会員
- 1979 年 9 月 九州労災病院名誉院長

研究業績

日本の整形外科の重鎮、整形外科全般にわたりその発展に尽力せられた。(詳細は天児民和教授退官記念研究業績目録集を参照)

その他の業績

- 1952 年～ 九州各県の肢体不自由児施設の設置に尽力
- 1953 年 4 月 第 26 回日本整形外科学会学術集会会長
- 1953 年 日本で初めて骨銀行を実施
- 1954 年 骨腫瘍登録制を全国で初めて西日本地区で実施、のちにこの制度は全国に普及した。
- 1954 年 12 月 福岡県肢体不自由児協会の設立に尽力、初代会長
- 1957 年 7 月 日本手の外科学会を設立
第 1 回手の外科学会総会会長
- 1978 年 10 月 第 14 回 SICOT (国際整形災害外科学会) 大会会長

賞 罰

- 1964 年 11 月 西日本文化賞受賞
- 1975 年 ドイツ一等功労十字勲章受賞
- 1979 年 1 月 朝日社会福祉賞受賞
- 1979 年 4 月 勲一等瑞宝章受章
受章理由: 多年医学教育と災害医学の研究に専念し, 社会福祉にも貢献した功による。

天児民和先生のリハビリテーション医学への御貢献を讃える

国立身体障害者リハビリテーションセンター名誉総長
津山 直一

第三の医学、あるいは医学の第三の相としてのリハビリテーション医学（および医学的リハビリテーション）なる新しい概念が日本にもたらされたのは、昭和25年から26年にかけて、故水野祥太郎、故小池文英両先生らがWHOのフェローとして欧米留学より持ち帰られたものであることは否めない史実である。日本医学会用語委員の一人としてこの語を解するものがなかった事実はそれを物語っている。

わが国におけるこの新しい分野の理解、咀嚼、受容は容易には進まなかったが、リハビリテーション医学の大きな対象が、四肢脊椎の運動障害であった点から、圧倒的に整形外科医の多くがこの新しい分野に理解を示し、日本の医学を奥行の広いものにしようとしたことは当然ではある。

天児民和先生も整形外科分野に留まらず、整形外科といわば表裏一体の近い関係にあるリハビリテーション医学に対しても早くから理解と関心を持たれ、日本リハビリテーション医学会の創設委員として尽力して下さったのみならず、第1回の故水野祥太郎、第2回の大島良雄両先生に続いて、第3回の日本リハビリテーション医学会を昭和41年4月5、6日に九州大学講堂で学会長として主宰された。

そのときには特別講演として九州大学同門の稗田正虎先生（鉄道弘済会）による「最近の義肢の進歩」が取り上げられ、九州大学整形外科の先代故神中正一教授時代の研究より海外留学によって多くの知見を得て来られた稗田先生より多くのものを教えて戴いた。また、シンポジウムとして故土屋弘吉教授司会の下に「医学教育におけるリハビリテーション」を取り上げ、当時新進気鋭であった石田肇・上田敏・佐久間譲爾・故原武郎・故中村裕の諸先生が真摯な討論をされているのも懐しく思い出される。しかもプログラムによれば、現在のリハビリテーション医学会のように、運動器系に偏することなく、弱視や心肺機能障害者のリハビリ

テーションをも含めた広いスコープの医学的リハビリテーションであったことも先生の先見の明を語るものである。

先生の門下から、原武郎氏が九州労災病院において、中村裕氏が太陽の家において、高松鶴吉・佐竹孝之氏が足立学園その他において、その他、数多くの方々が各方面のリーダーになられたことも先生のリハビリテーション界への御貢献の大きさを示すものである。また、昭和39年東京オリンピックのあとで、障害者オリンピック（パラリンピック）を日本に誘致されると共にSir Ludwig Guttmann、中村裕先生らとともに国際パラプレジア学会を日本において開催され、これを機に日本パラプレジア学会を創設されたこと、国際義肢装具学会（ISPO）の日本代表を務め、日本の義肢装具の水準向上に尽されたことも先生のリハビリテーション界への大きな御貢献として忘れてはならないと考える。

創設以来、昭和52年まで日本リハビリテーション医学会の役員をお務め下さり、その後も名誉会員として御指導下さった文字どおりの日本リハビリテーション医学会の育ての親の一人である。先生のありし日を偲び、御貢献、御寄与に対する御礼の念をこめて先生を追悼する。

先生を偲ぶ

西南女学院大学保健福祉学部教授
高松 鶴吉

5月14日、その日の北部九州は季節外れの大雨だった。その大雨の中、式場の大学講堂一杯に人々は集まって溢れた。

その告別式の終わり、ただ一声遠雷が鳴った。私はオイと呼ばれたように思い、遙かな昔を思い出した。あの頃はすでに大所帯だったが、全員での宴会は多かったように思う。

先生は酒に乱れず群がる献杯を干しておられた。私たち若い医局員は苦笑される先生を前に「村の鍛冶屋」とか「叱られて」という童謡の替唄を唱った。前者は

先生を頑固一徹な鍛冶屋の親父とし、後者は叱られてオロオロする医局員を描いたものだった。「オイと親父が呼びやせぬかあああ」というその終句と、怖かったが親しかった先生の当時を、あの遠雷は思い出させたのだった。

この春、先生に長文の手紙を書いた。私の定年退職はいいが、後任を小児科医と決めたことを悲しまれるだろうと悩んでの手紙だった。先生の耳はすっかり遠くなり面談も筆談となっていたので、事情を語るには手紙が最良と考えてのことである。

先生からは間もなく定年を労う葉書を頂き、3月末、後任者と共にご挨拶に伺った。先生の家は「これがあの有名な先生の家なのか」という質素なたたずまいを変えていない。だが、先生は更に少しく小さく、おだやかになっておられた。「同門の者に譲らなかったと残念がるが君、時代だよ。いいじゃないか。」先生はこたわられず、私の胸は晴れた。

それから十日にもならぬ訃報だったのだ。お元気であったのにと、最後にお会いできて良かったとも思いつながら、それを聞いた。

医局時代、「自分を可愛がってくれた農学部教授に脳性麻痺のお嬢さんがおられ、農学部の若手から治療

法がないことをなじられたことがあってね。」と話されていた。

そのこともあってか、療育の世界にも心熱く、肢体不自由児施設を福岡・佐賀・別府・宮崎と育てられてきた。最後に北九州市が作ったとき、先生は私を推薦され、私は医局を離れて先生と遠くなった。

ところが先生は間もなく定年となり、近くの九州労災病院に移ってこられた。私は医局時代よりも密に薫陶を受け、怠惰になりがちな精神は時に活を入れられて、論文も学会もどうやら続けることができた。

小さな施設が拡大を続け、とうとう総合療育センターになったとき、故人になられた横浜の土屋先生が来られ、当時は稀なCTまで装備しているセンターに感心された。天児先生のお名前を出すと、そうだろうととも納得された、そのお顔が今でも浮かぶ。

整形外科はもちろんリハビリテーションの世界でも先生の弟子は多い。だが次第に兄弟子たちも老境に入り、末弟の私がこうして書かせて頂いている。思えば私たちは彼の円熟期の弟子であり、兄弟子たちよりは先生に甘えて育った感がある。末っ子は可愛がられるというが、先生の思い出には辛さと共に甘さが香る。

お知らせ

第11回電気刺激療法研究会

会 期：1995年12月9日（土）午後1時より

会 場：駿河台日本大学病院3階講堂

東京都千代田区神田駿河台1-8-13

TEL 03(8293)1711

会 長：丹沢章八（明治鍼灸大学大学院）

特別シンポジウム：神経移植と電気刺激一長期追跡
結果と将来の展望を探る

シンポジスト

島 史雄（九州大学医学部脳神経病研究施設）

西野仁雄（名古屋市立大学医学部生理学第二講座）

板倉 徹（和歌山県立医科大学脳神経外科）

坪川孝志（日本大学板橋病院脳神経外科）

招待講演：「気」を科学する

町 好雄（東京電機大学工学部）

一般口演：以下のように口演またはビデオによる演題を募集します。演題申し込みは400字詰め原稿用紙に演題名、所属、演者名、要旨（200字以内にまとめたもの）、連絡先の順に記載し下記宛て送付下さい。なお、ビデオによる演題提出の場合はその旨を明記して下さい。ビデオはVHSテープをご使用下さい。

演題締切：1995年8月25日（金）消印有効

送 付 先：〒271 千葉県松戸市南花島向町315-1

（株）日本メディックス企画部内

第11回電気刺激療法研究会事務局宛

TEL 0473(68)8711（代）

FAX 0473(68)1535